

孤独が癒されるとき

藤澤量正

[013]

本願寺出版社

孤独が癒されるとき

目次

I 孤独のなかで

- 生は存の外のこと 9
三つの苦しみ 20
五つの畏れ 35
孤独を超えるもの 48

II 人生の明暗

- 発想の転換 64
かなしみに克つ 79
生きる意味 94

- 仏のめぐみ 107

III いのちの帰するところ

- いのちの甦り 124
耳を洗う 138
相続すべきもの 154
いのち安らぐとき 170
あとがき 188
新書へのあとがき 190

『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈
版聖典』と略記しております。

I 孤独のなかで

生は存の外のこと

日本の歴史の上では、数え切れない程多くの内乱があった。そのなかで最も悲惨な戦いと言われたのは保元元年（一一五六）に京都で起こった保元の乱である。これは、皇位をめぐって不満を持つ兄の崇徳上皇と弟の後白河天皇が激しく対立し、公家も武士も、親子兄弟が敵味方に分かれて、互いに命を奪い合うという内戦であった。

この内乱の様子を詳細に記したものに『保元物語』（作者不詳）という書物がある。鎮西八郎為朝ためともの奮戦ぶりなどが描かれたこの軍記物のなかに、天皇側についていた源義朝（頼朝・義経の父）の言葉が出てくる。彼は、上司の信西しんせいから、親・兄弟を捨てて天皇側についたのは殊勝なことと賞められた上に、このたびの戦の大將に任ぜられたからには、忠勤を励むようにと言われた。当時、武士は公家に仕えていた。信西は、義朝の父である為義や弟の為朝が上皇側に組しているということを知っていたので、義朝の

苦衷を察して敢てそのように語ったのであろう。そのとき義朝は、

死は案の内の事、生は存の外のことも也。

〔保元物語 平治物語〕『日本古典文学大系』第三一巻、九一頁

と信西に申したと記されている。この言葉は、死ぬのは思っていた通りになることであり、生きるのは思ってもいないことであるという意味である。義朝は、この言葉を発することによって、死を覚悟して戦場に赴くのであるから、生きて帰るなど思ってもいないという心情を吐露したのであった。

しかしこの義朝の言葉は、われわれがこの人生を生きる上で最も大切な心得を教えているようである。なぜなら、戦時でなくても、死は必然であり、生は偶然であるというのがまちがいになく人生の事実だからである。ともすればわれわれは、死は偶然のこととあろう。

死を忘れて日暮らしをしているわれわれに、警告を発した文章があった。京都学派として有名な哲学者田辺元博士の「メモント モリ」という短文のエッセイである。この「メモント モリ」という言葉は〈死を忘れるな〉という意味のラテン語のようで、死を忘れないように当時の人間を戒めたものである。このエッセイは、昭和三十三年に書かれたものであるが、氏はこのなかで、

毎日のラジオが、たあいなない娯楽番組に爆笑を強ひ、芸術の名に値ひせざる歌謡演劇に一時の慰楽を競ふのは、ただ一刻でも死を忘れさせ生を楽しませようといふためではないか。「死を忘れるな」の反対に「死を忘れよ」が、現代人のモットーで